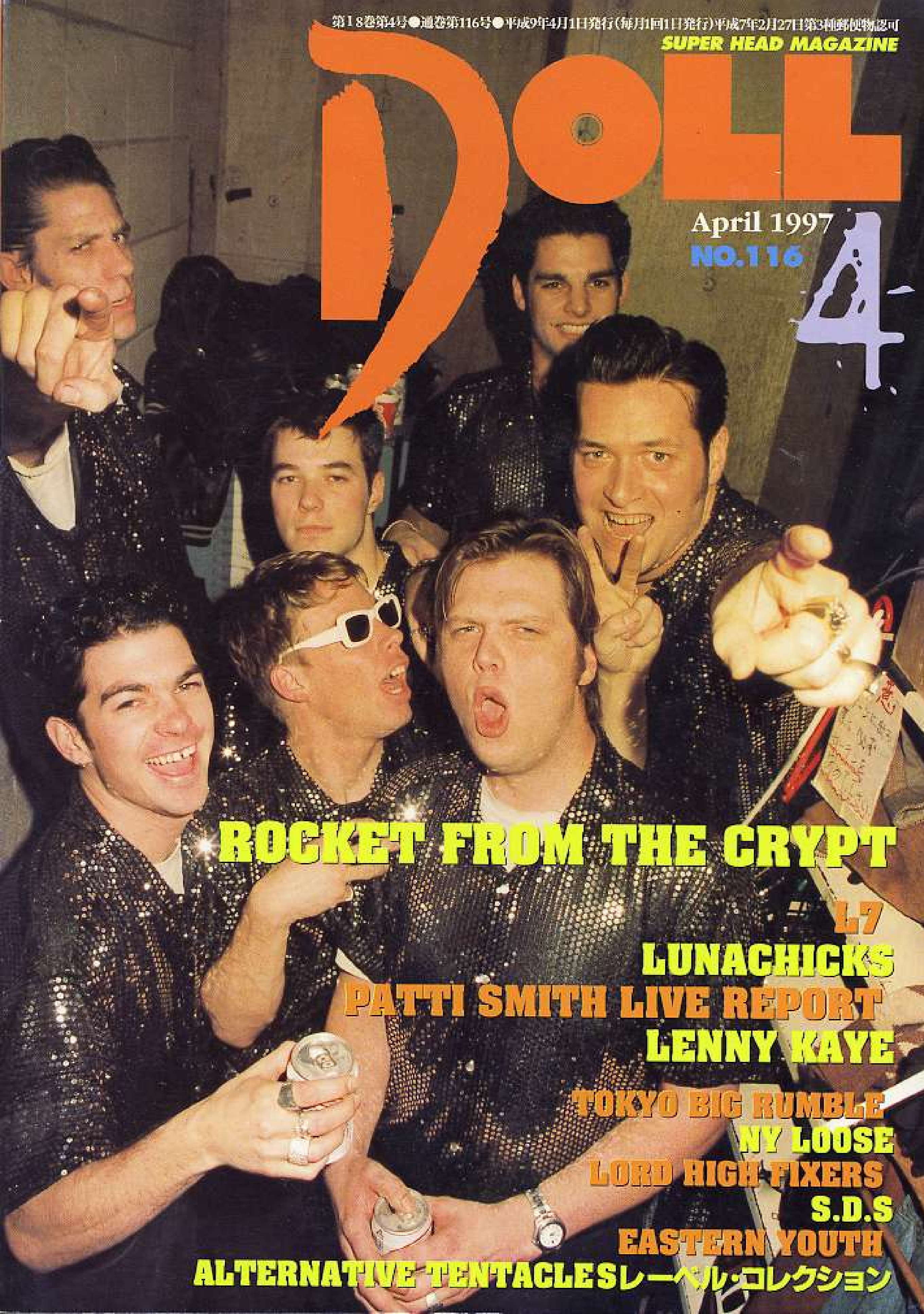
第18巻第4号●通巻第116号●平成9年4月1日発行(毎月1回1日発行)平成7年2月27日第3種郵便物認可

SUPER HEAD MAGAZINE

DOLL

April 1997
NO.116
4



ROCKET FROM THE CRYPT

L7
LUNACHICKS
PATTI SMITH LIVE REPORT
LENNY KAYE
TOKYO BIG RUMBLE
NY LOOSE
LORD HIGH FIXERS
S.D.S
EASTERN YOUTH
ALTERNATIVE TENTACLESレーベル・コレクション

LORD HIGH FIXERS

interview

テキサスのパンク・シーンは凄く自由で、決まったルールがなかった、それが音楽面にも出ていたよ

INTERVIEWED：関口 弘　*TRANSLATED*：川原真理子　*PHOTO*：関口エリ

「いやー、最高でしたね」。ライヴが終わった後、僕にこう話しかけて来たのは、本誌の佐藤君であった。USパンク/ハードコアを熱心に聴いている彼の賛辞だけに、なんだか自分が誉められているようで嬉しかった。ステージの上を所狭しと暴れまくる彼らのライヴ・パフォーマンスは、バンドの本質にあたるパンク/ハードコアの部分を露にした。直に観ないとわからない。そんなライヴはよくあるが、ここまで自分の描いていたイメージとのギャップが激しいのはホント稀である。個人的にTIMと話す機会があったのだが、本当にいい人です。決しておごらず、常に若い人たちをヘルプしようという意識を持っている。質問しても、俺だけが答えちゃ悪いなって感じで、すぐに他のメンバーにふろうとする(その割には彼の返答がメインだが)。テキサス(オースチン)のシーンが未だホットなのも、彼のような人物がいるからこそなんだな、としみじみ思ったりして…。ということで、最初の質問はかつてのテキサスのパンク・シーンについてから。まずはこれから始めないと。メンバーはSTEFANIE PAIGE FRIEDMAN(Ds)、ROBBIE BECKLUND(B)、ANDY WRIGHT(G)、MIKE CARROL(Vo)、TIM KERR(G)の5人。

［1月17日／下北沢ぶーふーうー］

▶まず、テキサスのパンクがどのように起こったか知りたいのですが。

TIM「もともとは、ロンドンとニューヨークから入ってきたんだ。77・8年にアート・スクール・カレッジの学生達を中心に、比較的年齢層の高い人たちの間で広まった。80年になるとハードコアが入ってきて、もっと年齢層が下の、キッズの間に普及していったね。これはね、当時ブラック・フラッグがアメリカ中のいろんな町に出かけていってショウをやってたからなんだ」

▶僕なんかはテキサスというと保守的というか、伝統を重んじているような人たちが大勢住んでいそうな場所という印象を抱いてしまうんですよ。だから当時テキサスでパンクというのは凄く異端な存在だったのではないかと。

TIM「いや、それはない。確かに政治の面からみ

れば保守的なんだけど、僕らの地元オースティンは元々学生街で、シスコなんかに似た雰囲気があって、住んでいる人たちはとてもフレンドリィさ」

STEFANIE「むしろそれは北の方じゃない？南の方はワーっと騒ぐのが好きだから」

TIM「テキサスってアメリカの他のどこの州よりも変わっていて、ユニークな所なんだ。パンクとかハードコアにしても、他とは位置付けが違っていたね。いわゆるパンクの定義みたいなのがあるじゃない？みんな黒い服纏っているとかさ。だけどテキサスのパンク・シーンは凄く自由で、特にこうしなければならないという、決まったルールがなかった。音楽面においてもその特質さは出ていたよ。例えば、バットホール・サーファーズのサウンドは、ある音楽スタイルに則ってああなったんじゃなく、独自の発想から生まれたものなんだ。これもテキサスという特異な場所だからこそ成し得たものだと思うね」

▶その頃飛び抜けて存在感のあったバンドは？

TIM「いっぱいいる。バンドがコミュニティとして存在していたから、みんなお互いを尊敬しあっていた。だから、"これだけは!"みたいな言い方は出来ないね。今に至ってもそれ(コミュニティ)は続いているよ。ビジネスとは離れたところの純粋な音楽仲間だから、誰が良くて悪いとかないんだ」

▶あなたたち(TIMとMIKE)が関わっていたBIG BOYS/POISON 13は、パンク/ハードコアにファンク/ブルースを取り入れてとても画期的でした。

TIM「うん。何かを取り入れるという意識があったわけじゃなく、ただ本当に好きな事をやっていただけなんだ。イングリッシュ・スタイルのパンクをそのまま真似るというのではなく、近場にある音の影響が出ているんだ」

MIKE「ブルース、ロカビリーにリンク・レイ。それとCHOCOLATE WATCHBANDにプリティ・シングスとかの60'Sパンクを好んで聴いていたから。パンクという概念に捕らわれず、好き勝手にね」

TIM「マイクは元々BIG BOYSのローディーだったんだよ」

ANDY「僕も当時から2人のことは知っていたよ。特にPOISON 13は僕のお気に入りだし。また、お互いにスケートボード仲間でもあったんだけど」

▶(MIKEとTIMに)POISON 13解散後はシーンから遠ざかっていたようですが。

TIM「僕はBAD MOTHERGOOSEというバンドで、スライ・アンド・ザ・ファミリー・ストーンみたいなファンクをやっていた。ノット・パンク・ファンク。ノット・ファンキー・ロック。純粋にファンクだ。その後はモンキー・レンチかな」

MIKE「POISON 13の後はジャンキーになっちゃってね。更生期間を更て、今に至ったんだ」(現在の彼はジャンキーだったとは思えない程、とても穏やかで控えめだ)

▶(TIMへ)リアル・ファンクからガレージ・パンク/ロックンロール・シーンへ戻って来たというのが感動的です。

TIM「まあ、ファンクに限らず何でも好きだったから」

▶では、LORD HIGH FIXERSについてですが、この5人が集まったきっかけは。

MIKE「僕は最初シーンの外にいたんだけど、JACK'O FIRE時代のTIMと再び交流する機会があってさ、それで誘われてパートタイムで歌ってみたら"何だこりゃ、まだ歌えるじゃないか"って自信を持ってね。そんな矢先にJACK'O FIREが解散してしまい、TIMと"やろうか"ってことになったわけ。僕らはその時SPOILERSにいたROBBIEに声掛けて、ドラムのSTEFANIEを連れてきた。ANDYはSUGARSHACKをやってたけど、"どうだい?"ってTIMが声掛けてこのメンバーが揃ったんだ」

▶昨年、いや一昨年ぐらいから、あなた達を筆頭にテキサスのガレージ系バンドの活動が目立ってますよね？

TIM「ほら、音楽シーンって一種の周期があるでしょ。ある時期になると若い人たちがたくさんバンド始めて、レコードを自分たちでリリースしたりするという。それがたまたま去年だっただけのこと。テキサスではガレージだけでなくストレイト・エッジ・シーンもあって、それが合わさって大きくなったんじゃないのかな」

▶シーンの盛り上がりという点で、他の地域が気になったりしませんか？例えばサンフランシスコ、シアトルとか。

TIM「ノー。テキサスの連中はオープンでフレンドリーだからそういったことは考えないよ。他で何が起こってようと気にならない」

MIKE「ひょっとしたら、他の地域の人たちがテキサスをうらやんでるんじゃないの。オースティンというのは音楽の伝統的な町だから、凄く有名なミュージシャンとか出ているし」

TIM「シスコやハリウッドだと、もっと閉鎖的で、内輪の中でしかやらない雰囲気があるよね。テキサスにはそれがない」

▶ただ、さっきも話に挙がりましたが、単なる内輪受けと違ったコミュニティがテキサスのシーンにあるわけですよね？去年MOTARDSがこっちでライヴをしたときに、INHALANTSのカヴァーをやってて驚いたんですよ。シーン内での絆みたいなものを一部垣間みせてくれて、何だか熱くなりましたね。

TIM「うん。うちだってMOTARDSの曲をプレイしたいよ。挨拶代わりにカヴァーするようなもんさ」

▶話は変わって、ライヴが素晴らしかったです。想像以上に激しいんで。

TIM「心から感じるままにやっているんだ。いつも上手くいくとは限らないんだけど、とにかく一生懸命やっている。それを観たオーディエンスの人たちが、少しでも自分でも出来るんだ、ってインスパイアされてくれたら自分たちがやっている甲斐があるもんだ」

▶更に話は変わって、メジャー観について聞きたいのですが？

TIM「それは考えないようにしている。だってあの手のバンドを観ると落ち込むもの。スターになりたいって願望が強すぎる」

▶というか、バットホール・サーファーズを例に挙げて聞きたかったんです。それこそ彼らは昔、TIMたちと同じコミュニティにいたわけですよね？

TIM「メジャーと契約することが問題ではない。要は契約した後の、バンドの行動が問題なわけで。バットホールの場合、全米でヒットしちゃってるわけだけど、全然彼らしくない曲が受けているんだよね」

STEFANIE「売れるために音楽スタイルを変えるというのは間違っている。ただ、メジャーのバンドでもいいバンドはいるの。自分を貫ければいいんだと思う」

TIM「実はBAD MOTHERGOOSE時代、メジャーからオファーがあったんだ。それがさ、当時流行っていたレッド・ホット・チリ・ペッパーズみたいな音を出せって、向こうが抜かしてきたんだよ。蹴ったよ、当然。冗談じゃない。奴らはその時流行っているのに、何かと変えさせたがる。メジャー行くのは悪いというより、それなりの覚悟が必要となってくる。余程自分たちがしっかりしてないとね」

▶そうですね。

TIM「一体どこまでがメジャーのラインなのか、よく判らないところがあるよね。半インディ、半メジャーみたいなレーベルもいっぱいあるしさ。それに今はコンピュータなどが発達して情報が隅々へ行き渡るから、小さなポジションにいるのは必ずしもデメリットとなるとは言えないよ。いや、デメリットどころかメリットになっているぐらいでさ。うちみたいなバンドも、十年前だったらとても日本になんか来れないよ。それが今、こうやってインタヴューを受けているんだからね。これも時代の変化のひとつなんだ。別にメジャーなんかに行かなくても出来ることは山程あるってことさ。だからこれでいいと思っているよ」

TIMが以下のバンドに感謝したいので載せてくれないかと言ってきた。GUITAR WOLF、GYOGUN REND'S、20/20、GASOLINE。